中学生の学校ストレス過程における因果関係の検討

○命婦 恭子¹・工藤 晋平²・岩田 昇³(¹名古屋女子大学・²京都大学・³広島国際大学)

キーワード：学校ストレス，中学生，因果関係

Examination of Causal relation in School stress process of Japanese Junior High School Students

Yasuko MEIFU¹, Shimpei KUDO² and Noboru IWATA³(¹Nagoya Women's University, ²Kyoto University, ³Hiroshima International University)

Key Words: school stress junior high school students causal relation

目 的

本研究では、中学生の学校ストレスの実態を明らかにするために、一般の公立中学校を対象に、年5回の調査を3年間に渡って実施した。ここでは、中1ギャップと表現される入学後から1年間の学校適応について検討を行いたい。発表者らのこれまでの研究では、年度当初のストレス、ストレス反応の高低による群わけを行うと、それぞれの群の特徴を1年間は維持しており、ストレス反応が高い群は、その後も他の群よりストレス反応が高く、レジリエンスやソーシャル・サポートが低いということが明らかになった(命婦ら, 2010)。ここでは、この結果を踏まえ、1年生の年度当初状況による1年間の学校ストレスの差異についての分析を行う。

また、1年生の学校ストレスとストレス反応の因果関係の検討を行う。さらに、ライフスタイルとの因果関係についても分析を行い、中学校入学というライフイベントを経験している生徒たちへ、どのような側面から援助介入を行うことが有効か考察することを目的としている。

方 法

1. 対象

広島県内のA公立中学校に2008年から2010年に在籍した生徒。本研究では、そのうち毎年の1年生677人を分析対象とした。08年233人(M:127, F:106), 09年252人(M:123, F:129), 10年192人(M:94, F:98)。

2. 尺度

- パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスインベントリー-中学生用(坂野ら, 2007): 学校ストレス、ストレス反応、ソーシャル・サポートの3尺度で構成されている。
- レジリエンス尺度(石毛, 2004): 意欲的活動性、原因探求性、楽観性、内的共有性の4下位尺度。
- ライフスタイル: 朝食摂取、睡眠時間、学習習慣など。

3. 手続き

2008年5月～2011年2月に年間5回、計15回の質問紙調査を実施した。配布回収は、担任により学級単位で行われた。無記名回答。IDとして出席番号の記入を求めた。

結 果

1. ストレス反応の1年間の変化

ストレス反応得点の変化パターンについてクラスター分析を行ったところ、5クラスターに分類された。各群の順位に変化はなく、全体の45.2%(246人)は、1年を通じてストレス反応得点が低いままであった。

2. 学校ストレスとストレス反応の因果関係の検討

各年度における1回目と5回目のストレス反応と学校ストレスの得点を用いて、交差遅れ効果モデルと同時効果モデルを作成し、因果の方向性の検討を行った(Fig. 1)。交差遅れ効果モデルでは適合度が低かった($\chi^2=134.21$, $p<.01$, CFI=.84, RMSEA=.35, AIC=160.21)。同時効果モデルの適合度は充分であった($\chi^2=0.37$, CFI=1.00, RMSEA=.00, AIC=26.37)。

ストレス反応から学校ストレスへのパスが有意であった。同時効果モデルを用いて、年度当初にほとんどストレス反応がみられない「健康群」と何らかの反応がみられる「症状あり群」の2群で多母集団同時分析を行ったところ、健康群では、ストレス反応から学校ストレスへのパスのみが有意であり、症状あり群では双方向のパスが有意であった。モデルの適合度は充分であった($\chi^2=2.08$, CFI=1.00, RMSEA=.008, AIC=54.08)。

考 察

入学から様々な生活の変化を体験しているにもかかわらず、半数近くの生徒には自覚的なストレス反応がみられず健康な様子がうかがわれた。さらにその傾向は1年間継続していた。

因果関係の検討では、ストレス反応が低い生徒で、経時的にも同時的にも学校ストレスからストレス反応への影響性が有意ではなかった。ストレス反応の低さが学校ストレスを低めている、すなわち、体調や気分がよい生徒は学業や友人関係について肯定的に評価しているという様子が示された。発表では、健康な生徒たちのストレス反応を低めている要因についても検討を行うために、レジリエンスやライフスタイルの影響を含めた分析結果を報告する。

引用文献

- 命婦恭子・工藤晋平・岩田昇(2010) 中学生のストレス・プロフィールにおける学校ストレスの縦断的变化 日本心理学会第74回大会発表論文集
 坂野雄二・岡安孝弘・嶋田洋徳(2007) PSI 小学生用・中学生用・高校生用マニュアル. 実務教育出版
 石毛みどり(2004) 中学生におけるレジリエンスと無気力関の関連. お茶の水女子大学人間文化論叢, 6, 243-252.

Fig. 1-1 学校ストレスとストレス反応の因果関係 (交差遅れ効果モデル)

Fig. 1-2 学校ストレスとストレス反応の因果関係 (同時効果モデル)